

「学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じた
エキスパート・ジャッジメントの涵養と大学組織の変容」

サブテーマ4 工学を中心とした全学PEPA

「学習システム・パラダイム」への 転換におけるPEPAの有効性

— 東京都市大学のケーススタディから —

伊藤通子（東京都市大学）・松下佳代（京都大学）

齋藤有吾（新潟大学）・中島英博（名古屋大学）

本報告で明らかにする問題

・目的

「学習システム・パラダイム」への転換におけるPEPAの有効性を検証すること

・問題

東京都市大学は

1)どのように「学習システム・パラダイム」への転換を図ろうとしているのか

- ① 授業科目レベルと、学位プログラムレベルを結びつけるには
- ② 教員個人の変容を、組織の変容へとつなげるには

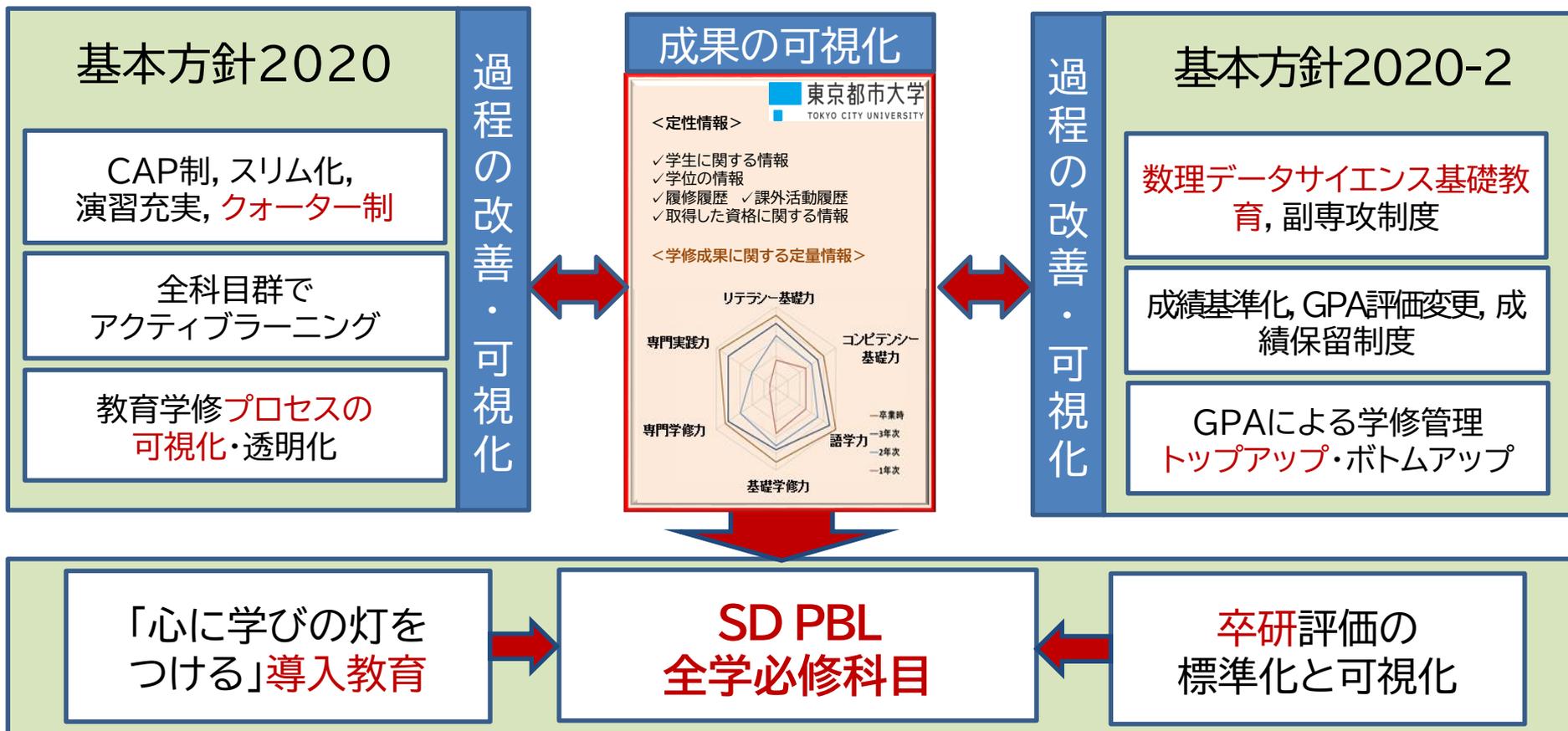
2)PEPAをどのように用いるのか

- ① 工学中心の総合大学の全学部で、PEPAを有効にはたらかせるには

SD PBL創設の背景

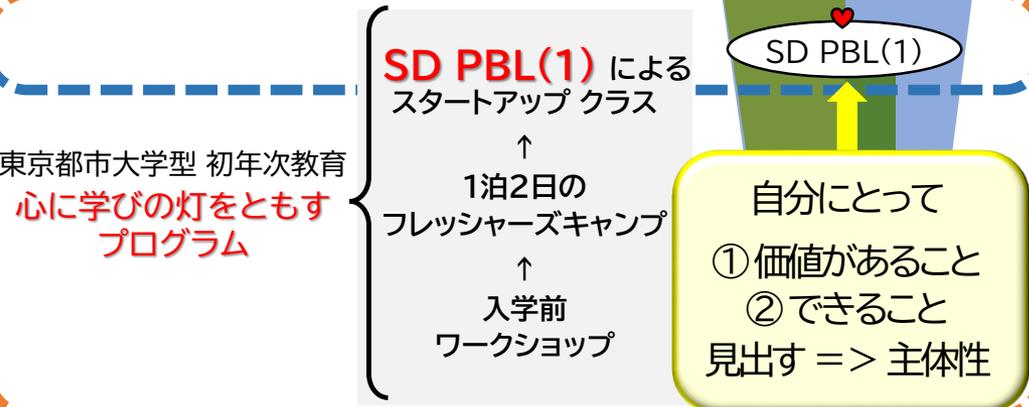
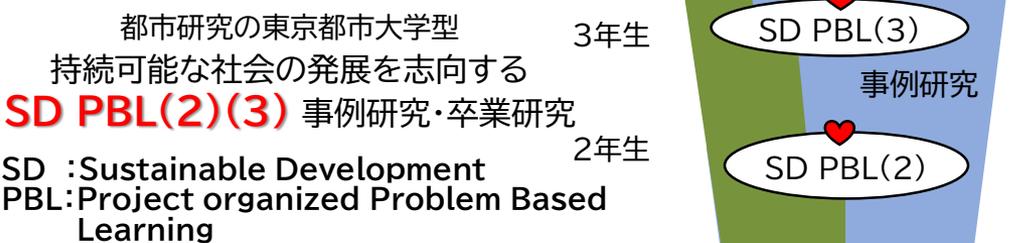
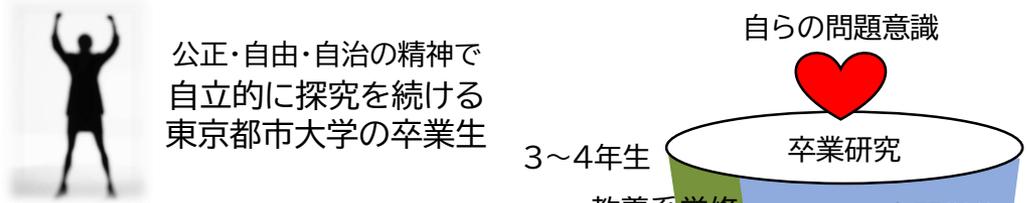
東京都市大学 中長期計画（アクションプラン2030）の教育改革の施策の一つとして

各ステークホルダーの問題意識に応え、教育課題を解決するために
教育理念や3Pを再整備し、SD PBLを設計



SD PBLの構造

初年次教育をスタートに SD PBL(1)~(3)から卒研へとつなぐ



卒業研究	SD PBLと事例研究、 他の授業の学びを統合する
全学部混合 SD PBL(3)	多様なステークホルダーと協働し 自分の専門分野を俯瞰して捉える
専門外からの視点を学び、 今までの学び(専門科目や実験や演習) を俯瞰、体系化する。 + 専門外のリサーチメソッド、考え方を学ぶ。	
SD PBL(2)	社会的文脈の中で 学科の学びの立ち位置を理解する
学科の特色と専門性や、 大学の学びと社会とのかかわりを理解する。 + 専門のリサーチメソッドを学ぶ。	
SD PBL(1)	心に学びの灯をともし 持続可能な社会構築に参画する第一歩
自校教育、SDGsの理解、 入学を意味あるものに、協働の理解 + 汎用的リサーチメソッドを学ぶ。	

SDGsの価値観で、ボーダーを超える概念を学び
自分の可能性を拓き社会変革の意欲を芽生えさせる

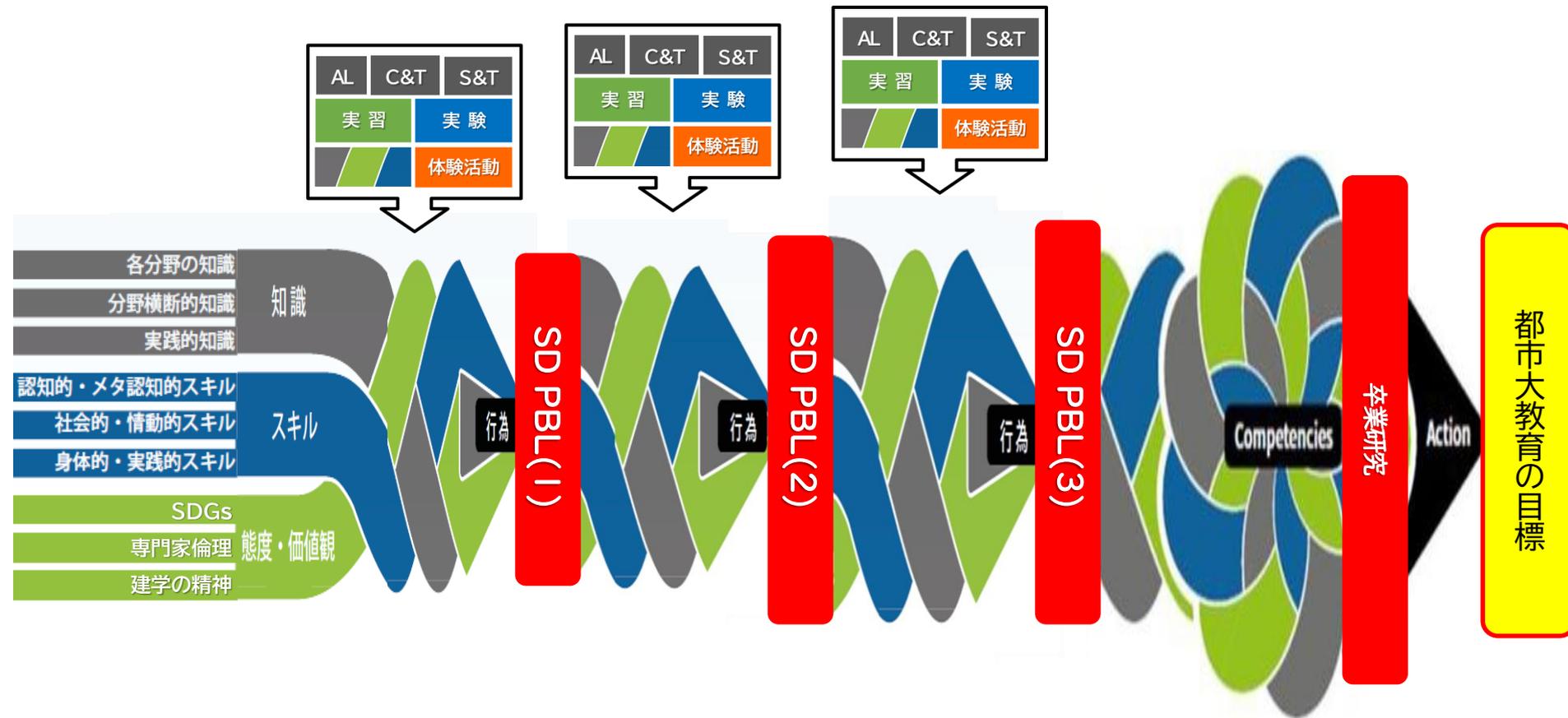
SD PBLと各授業科目の達成目標の関係

- 最終的に、学位プログラムで示した学修成果を獲得することを目指して、学生が、4年間の学習成果を主体的・儉約的に累積できるカリキュラムと評価の仕組みを提供する。
- 学生の主体的な学修を支援するためには、**各科目のカリキュラム配置の意図**がわかり、各科目の学習成果を測定・フィードバックするための、**基準が明確な評価を設計・実施**する

項目 \ 学年科目		1 学年		2 学年		3 学年		4 学年
		PBL(1) 学習目標	既存科目 学習目標	PBL(2) 学習目標	既存科目 学習目標	PBL(3) 学習目標	既存科目 学習目標	卒研 学習目標
		知識やスキルを状況に合わせて使う統合的科目	知識やスキルを学ぶ科目群	知識やスキルを統合して使う		知識やスキルを統合して使う	知識やスキルを学ぶ科目群	これまでの学びを集大成する
学科のDPに即した学位認定の到達目標	学修目標1 (e.g.理論)	1~30		具体的で測定可能な目標明示が求められる				
	学修目標2 (e.g.汎用能力)	1~10	11~20	21~30				
	学修目標3 (e.g.高度研究スキル)						1~15	16~30
	学修目標4 (e.g.チームワーク)	1~6		7~13		14~20	21~25	26~30
	学修目標5 (e.g.質問力)	1~4	5~8	9~12	13~16	17~20	21~25	26~30
	⋮	本学の教育のステークホルダーとの協議に基づいて決定された、他大学にはない学科の特長、東京都市大学らしさが表れているか …ある程度の抽象性が求められる						

※30が卒業認定レベルとする

SD PBLは統合的能力を発揮する科目



1)-② 教員個々の変容を、組織の変容につなげるために SD PBL デザイン研究会

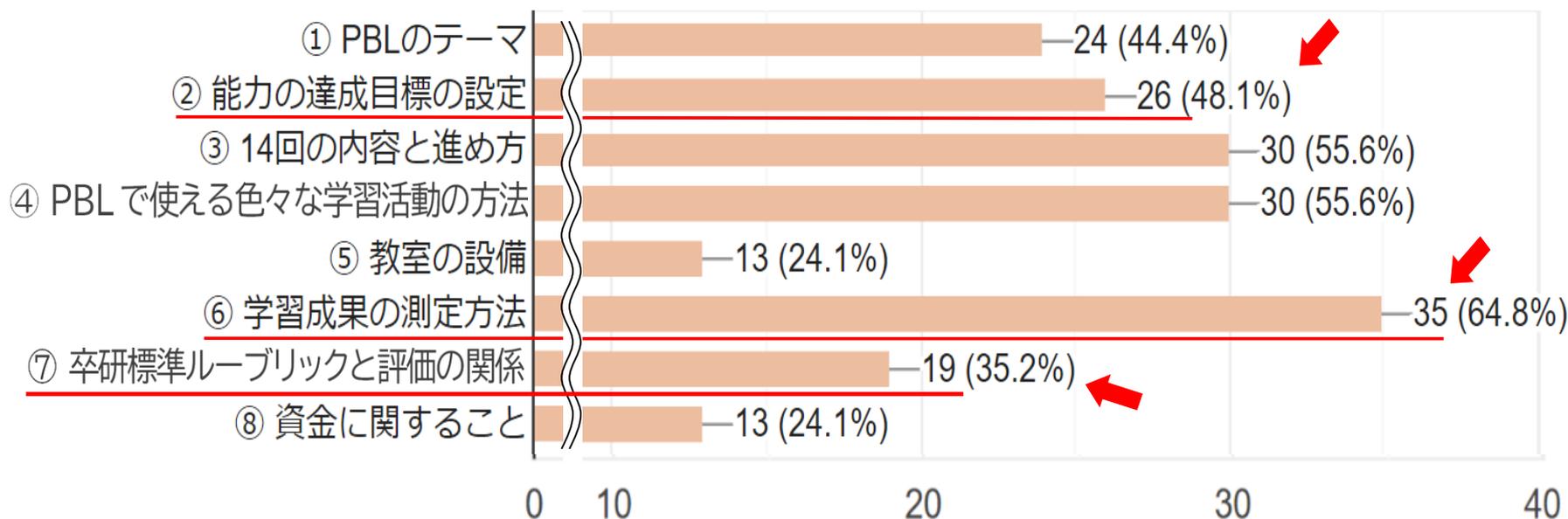
エキスパート・ジャッジメント涵養のしくみ

- ・SD PBLは**複数教員で実施**し、研究会には1学科**2名**参加
- ・教員の期待や関心事を中心に、毎回のテーマを設定、**専門家の支援、理解と共有**
- ・毎回**WS形式**で、各学科の学修到達目標に応じたPBLコースをデザインしていく

		日時	内容	外部講師
	2018年11月	APシンポ	・学修成果に基づく学位プログラムの設計と教学マネジメントのあり方	深堀 總子 (九州大学)
2019	第1回	6月	・SD PBLの目標と習得させたい能力	
	第2回	7月	・ファシリテーション	石川 一喜 氏 (拓殖大学)
	第3回	8月合宿	・SDGsを志向した大学教育とPBL ・授業デザイン	石井 雅章 氏 (神田外語大学) 関戸 大 氏 (東京大学)
	第4回	9月	・学生を育てる評価	9/17 松下 佳代 (京都大学)
	第5回	12月	・グラフィックシラバスと授業の設計	
2020	第1回	6月	・評価作成ワークショップ	松下 佳代 (京都大学) 斎藤 有吾 (新潟大学)
	第2回	9月	・(1)の振り返りとSD PBL(2)基礎知識	
	第3回	10月	・SD PBL(2)の設計に向けて(評価)	松下・斎藤
	第4回	11月	・SD PBL(2)の設計に向けて (指導法)	
		11-12月	第1回 インタビュー調査	中島英博(名古屋大学)・松下・斎藤
第5回	12月	・SD PBL(2)の設計に向けて (シラバス)		

教員の期待から研究会のテーマを設定

1. SD PBL(2)(3)に関して、教育開発機構の支援やガイドブックに期待することを教えて下さい。(58名回答)



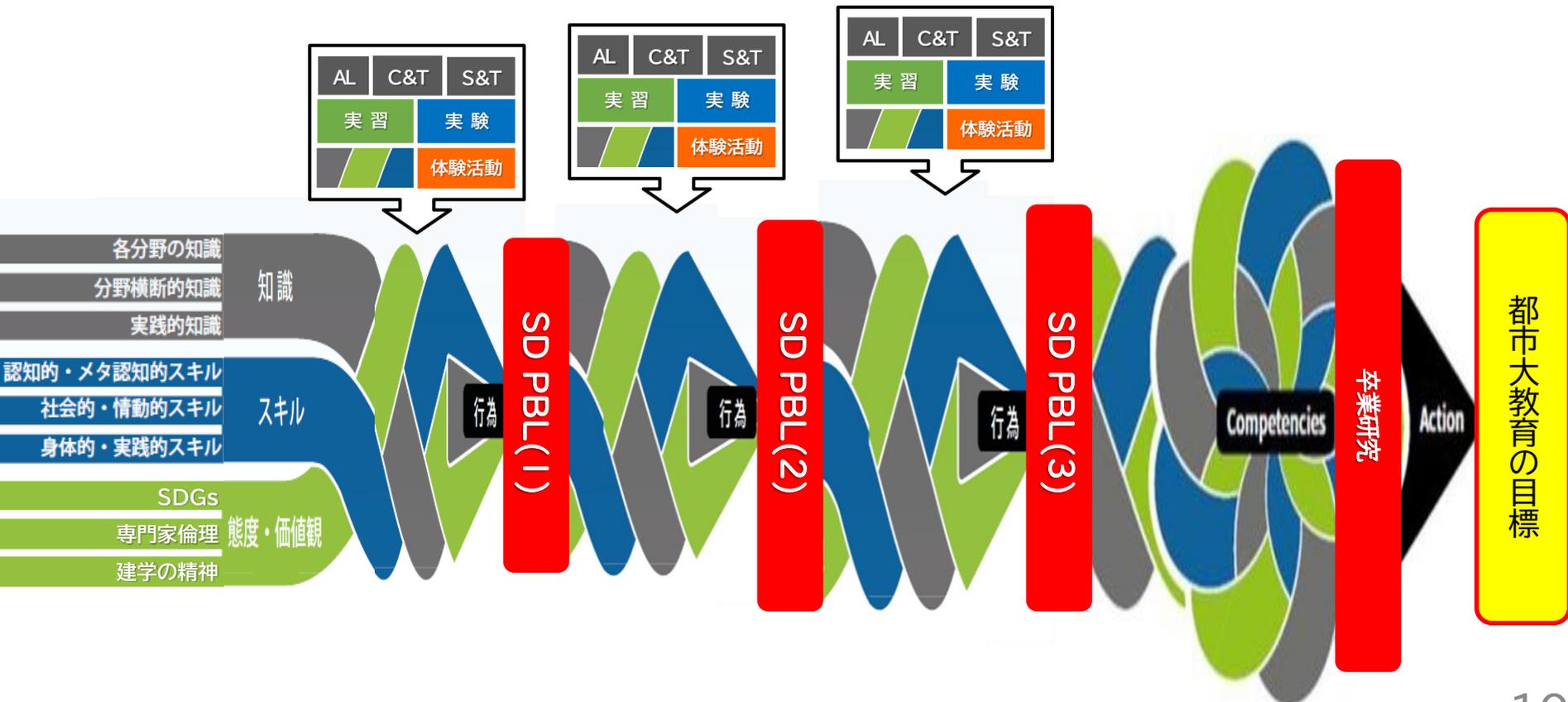
2. Q1でチェックを付けた項目について、具体的な内容を教えて下さい。

- ・評価に関すること
- ・設計やテーマ、内容に関すること
- ・指導に関すること
- ・PBL理論に関すること
- ・オンラインに関すること / ・キャリア形成との関連 / ・設備や費用に関すること...

2)-① 総合大学の全学部で、PEPAを有効にはたらかせるには 統合的能力を発揮する科目で評価する

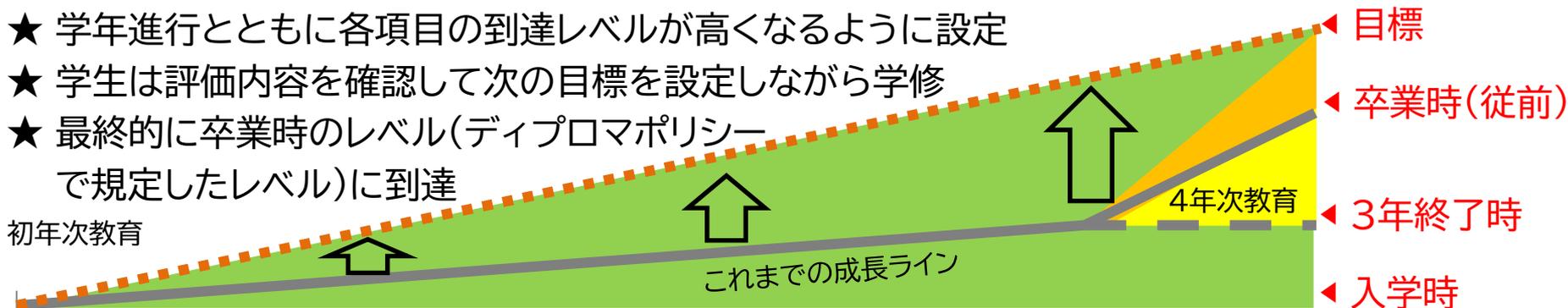
SD PBLや卒業研究
統合科目の評価

= PEPA理論の重点科目の評価

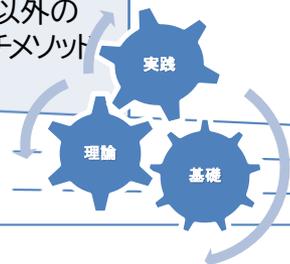


SD PBLの評価をマイルストーンとして成長を支援

- ★ 各年次のSD PBLを、**卒研と同じ評価項目で評価**
- ★ 学年進行とともに各項目の到達レベルが高くなるように設定
- ★ 学生は評価内容を確認して次の目標を設定しながら学修
- ★ 最終的に卒業時のレベル(ディプロマポリシーで規定したレベル)に到達



1年 (入学前を含む)		2年		3年		4年
導入教育型 SD PBL (1)	PBL(1)で活用する 知識科目	問題認識型 SD PBL (2)	PBL(2)で活用する 知識科目	分野横断 問題解決型 SD PBL (3) + 事例研究	PBL(3)で活用する 知識科目	卒業研究
	PBL(1)で活用する 実技科目		PBL(2)で活用する 実技科目		事例研・PBLの 実技科目	
	汎用的 リサーチメソッド		専門の リサーチメソッド		専門以外の リサーチメソッド	
専門科目群						
基礎専門科目群						
共通科目群						
課外活動						



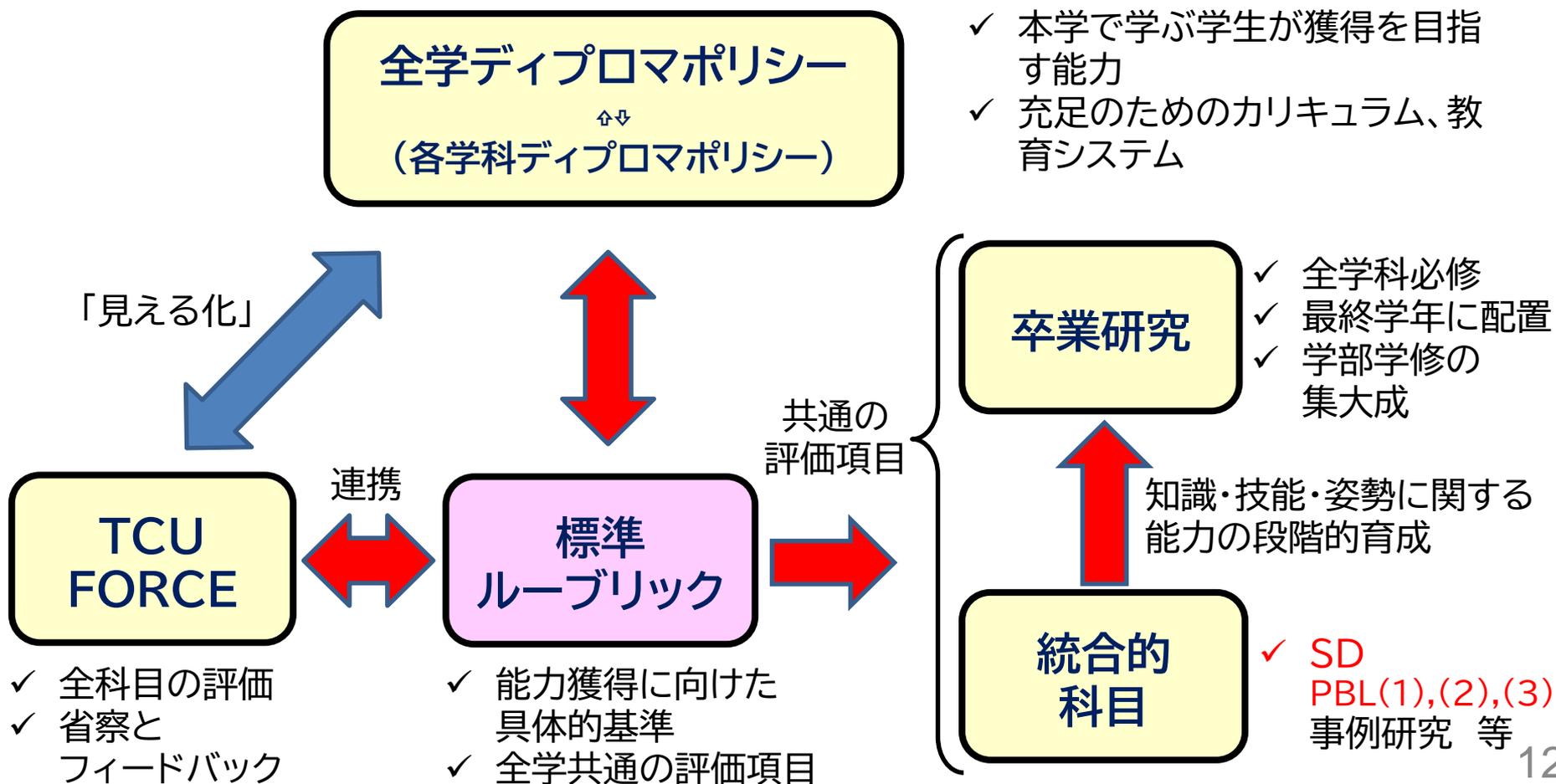
TCU-FORCE

による
形成的評価
↓
学修支援
内部質保証の
仕組み

DSによる
学修成果可視化
↓
外部質保証

2)-① 総合大学の全学部で、PEPAを有効にはたらかせる 都市大 評価システムの構築

目標と現状を、確認し省察しながら成長できる学習環境を構築中

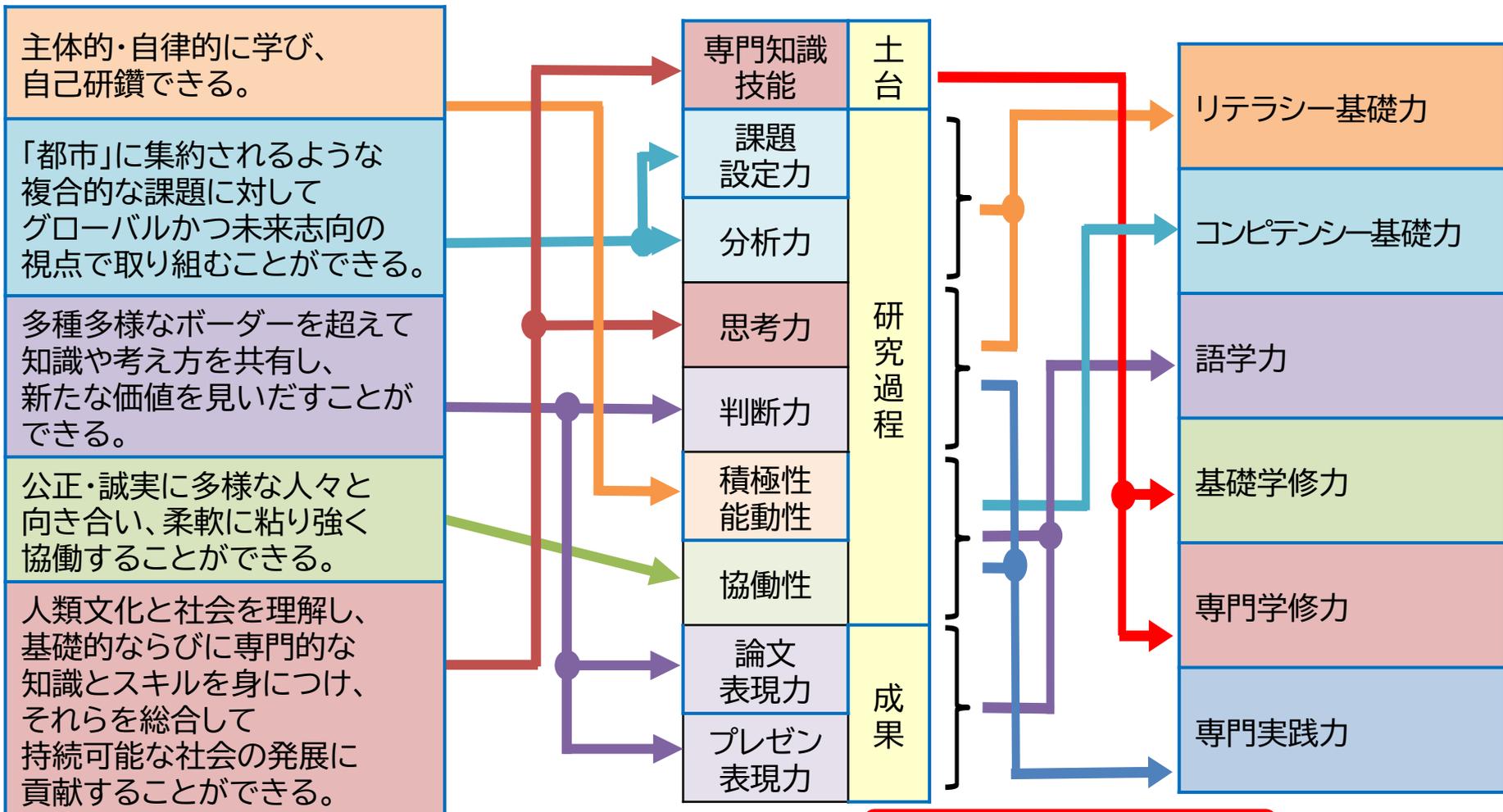


全学DP・卒研標準ルーブリック・TCU-FORCE

全学ディプロマポリシー

卒業研究用ルーブリック評価項目

TCU FORCEの6つの力



※ 今後の随時改良が必要

まとめ

東京都市大学では

1) 「学習システム・パラダイム」への転換に向けて

- ① SD PBLの設計(達成目標)で、授業科目レベルと、学位プログラムレベルを結びつける
- ② SD PBLデザイン研究会で、教員個人の変容を、組織の変容へとつなげる

2) 工学系総合大学でPEPAを全学展開するには

- ① SD PBLや卒研を統合科目として位置づけ、PEPAの重要科目とみなす
 - － 1、2年生では各学科の個性・多様性を尊重して分野独自の基礎能力を育み
 - － 3年生では専門分野横断で、全学的教育目標に掲げる俯瞰力等を育成する
 - － 各専門をつなぐために、SDGsの理念で複合的都市問題に取り組む
 - － PBL実践は、オルボーモデルProject organized Problem-BLに倣う

・課題

SD PBL(3)において、学科によって異なる多様なパフォーマンス評価のための、評価課題や評価基準をどのように協調させて実施するか

今後の研究計画

•これまで

2020年	5-8月	各学科によるSD PBL(1)の設計と実施 SD PBLデザイン研究会への支援
	5-11月	個人のエキスパート・ジャッジメント調査 SD PBL(1)の担当教員、一般教員 1回目
	11-12月	組織の変容 面接調査 SD PBL(1)の担当教員 1回目

•アクションリサーチ的研究

今後の課題となるSD PBL(3)の評価に向けて、SD PBL(2)における「学修成果アセスメント・ツールの開発・共有・活用」を支援しながら、SD PBLのカリキュラムと授業のデザイン、およびPEPA(評価のデザイン)を実施していく。

その過程で、個人および組織の変容を捉え、そのメカニズムを明らかにする。

- －個人の変容: 「エキスパート・ジャッジメント調査」
- －組織の変容: 「フォーカス・グループ」(インタビュー)